

たった4世帯の移住島で村起こし中

モルジブ

本来なら7月には島の人たちに別れを告げ、2年間の任期を終え帰国する時期である。自分は好運にも1年活動を延長することが決まっているので、もう1年やれる。2年で終えることになっていたら活動に悔いを残して帰国せねばならなかったであろう。家族、任国の人をはじめたくさんの人々に感謝したい。



視察先トゥラドゥー島で。「リエラージェフン」と呼ばれる伝統工芸品職人たちと

はさまじゅんいちろう
 間 純一郎 (29歳)
 5/1・モルジブ・村落開発普及
 員・神奈川県出身

ようやく4世帯になった モルジブの移住島が私の 仕事場

自分は首都マレーの120キロ北に浮かぶマーフィラフシ島というところで働いている。所属はアトール行政省・SIDU (Selected Islands Development Unit) という政府で選んだ9つの島の移住プロジェクトを管理する局である。

現在モルジブは、世界一人口過密な首都マレーをはじめとしていくつかの島に港湾・電力・教育・医療・雇用機会などインフラストラクチャーが集中している。数ある島国の中でもとびぬけて国土の小さいモルジブ(面積は淡路島のほぼ2分の1)は、どの島も歩いて数10分で一周できる大きさで起伏がない。いくつかの島々はジャングル部分がなく、島の端から端まで住居が密集し生活環境は悪くなる一方だ。

SIDUは社会・経済機能を地方へ分散させるというこの国の最優先課題の中で、人口移住プロジェクトを管理しているわけだ。任地マーフィラフシ島は8年前に無人島から開発の始まった島で、現在4世帯(赴



モルジブは、インド洋に浮かぶ「真珠の首飾り」といわれる。造礁サンゴがつくる独特の景観はこの名の通りで、南北823キロ東西130キロに広がる島々は1190を数える。このうち人が住むのは200の島で、一つ一つの島が独自の暮らしを続けている。写真中央はマーフィラフシ島

任当時は3世帯)21名とプロジェクト・オフィスのスタッフ、学校の先生など約10名が居住し、モスク・学校・水タンク・建物だけのヘルセセンターなどがすでにでき上がっている。

協力隊はこの島で「移住促進のため、自給生産を手始めに農業、畜産、漁業などの広範囲の中から現金収入源の道を開き、島の開発へ寄与する」ことが任務として要請されている。隊員は私で2代目で、赴任した当時には前任者が開いた畑と井戸があった。

最初の半年近くはとにかくこの



島で最も親しい家族（ジャウファル一家）とその親族。後列右はサミーマー

自然環境を知るための小規模な野菜栽培、島の共同作業（水タンク設置、配管工事など）の手伝いをするほかは、焦る気持ちを抑え、状況把握、情報収集に努めた。

友人であり仲間でもある、島の人々の暮らしと課題

モルジブの地方島の中でも極端に人口が少なく、特殊な環境であるこの島の生活を見てみよう。各家の主人は敷地の整備、食堂、船の担当別というように、プロジェクト・オフィスに雇われる形でワーカーとして働いている。

水には1メートルも掘れば湧き出す淡水の井戸を使っている。食事はワーカーと一緒に魚のカレーか、「ガルーディア」と呼ばれる魚のぶっかけご飯（魚の煮汁にとוגがらし、ライムなどを混ぜてご飯にかける）を食べる。野菜は手に入りやすく、地方では玉ねぎ、とうがらしくらいしかない。モルジブ人は、その他種類かの葉をたまに調理に使う程度だ。店はまだまだなく、物資は近くの島から買ってこなければならぬ。電気は夜6時から11時まで。住居はサンゴを砕いて作ったり、やしの葉を編んで作ったりしている。学校では一人の先生が4人の生徒に教えている。モルジブ人は100パーセントがイスラム教徒なので、1日5回の「祈り」が、静かなこの島の1日にリズムをつけている。

こうした島の生活なのだが、困ったことにこの4家族、出身島が違うからか、あまり仲が良くない。

この島で10人と最も家族が多く、4年前首都から移ってきた家族の場合を見てみよう。ここの奥さんサミーマーは、自分にとって最も心休まる人で、厳しいデイベヒ語の先生でもある。相談事はたいてい彼女にす

る。そこで彼女に「今、この島の生活に満足してる？」と聞いてみた。「うん、とっても満足しているよ。水はいいし、環境もいいしね。マーレ（首都）では狭い部屋に家族全員がいたから、子供たちはすぐ風邪をひくし、車も危ないしね。もちろん教育と医療は心配だったけど、もうマーレには住めないと考えたから

ね」と答えてくれた。旦那のジャウファルにもインタビュー。「やつぱりこつちがいいよ。でも収入はマーレの半分だね。もちろん出費も少ないけどさ。こつちへ来る時は大変だったんだ。マーレは2階、3階へ建て増しラッシュだろ、俺、古いトタンをいろんな人にもらって、ためといたんだ。来る時は、建築資材から子供から全部大きな船に乗せてきたんだ。チャーター料は1500ルフィア（月収の15倍）だったな」。

「一番下のファートゥンはこの島で生まれた子供だよな？」
「あー、この島で準備したんだ（笑）。初めての島での出産だったから、政府が5000ルフィアくれたよ。初産の家には1万ルフィア出たらしいよ」。この家族の場合、食べにくいのが精一杯、貯金はできない

という（表A）。今年の子供たちの教科書が買えず困っていたが、運よくプロジェクトの島ということで、教育省が何とかしてくれた。

この島の場合、おおむね基本的な生活環境は問題ない。自分たちの生活をめぐる状況も大體理解している。あとはインフラ整備とともに、少しでも自給の質を高める一方、新たな現金収入源を確立することが、当面の課題のようだ。

【表A】 ジャウファル一家のある月の収入例
(単位ルフィア 1米ドル11・72ルフィア) 家族数10名

収入	
プロジェクト・オフィスの給料・925、ヤシの実の売り上げ(120個)・90	計1,015ルフィア
支出	
米50キロ・208、小麦粉38キロ・163、砂糖45キロ・306、ドライミルク2缶・190、玉ねぎ2キロ・20、スパイス1キロ・14、チリパウダー800グラム・16、塩1キロ・2、魚・なまり節6本・150、生カツオ2本・60、シャンプー3本・30、石けん4個・14、	計1,173ルフィア
備考一聞き取り調査によるため、精度は参考程度。出かせぎによる貯金も若干あるよう。年間では、服、ブーツ等の支出も生じる。	

この島の土壌はかなり貧困であるが、施肥さえすれば、ある程度でき



マーフィラフシ島棧橋付近と島のドーニ（船）

るようだし、作りさえすれば内需はある。養鶏も肉、卵とも地のものはインド産より高く売れるようなので、当面は前記の2点を活動の柱とすることとした。そんなわけで、デモンストレーション・ガーデンを作り、平飼い養鶏舎が完成し、いよいよというところで、とんでもない話が伝わってきた。

「支出ばかりで一向に移住の進まないこの島のプロジェクトを、中止

すべきかどうか」が省で話し合われていると言うのである。場合によっては現在住んでいる人々を他島に移し、リゾートなど他の目的の島に変えようかなどの意見もあるらしい。首都のディレクターと話してみると、まだ未定だが、任地の変更もあり得るから頭に入れておいてほしいという。なす術もない自分としては、とりあえずわかってきた移住の進まない原因についてレポートを提出した。

1. 人々に与えられる敷地が小さいこと（20×12m）。
2. 近隣の2大過密島のリーフを埋め立てることを政府が許可済であること。
3. 漁業を中心に島が「回る」だけの「ある程度の人口」移住が困難で、何らかの移住インセンティブが必要なこと。
4. 移住当初の「家を建てること」と「収入を得ること」の物理的、経済的困難さ、などである。

というわけで、せっかくな島にも慣れ、仕事をスタートしたばかりであったが、

他島へ任地が変わる可能性もあり、調整員の助言もあって、一定期間国内を視察し情報収集することとした。

3度の挑戦で隊員になった経緯と各島の実情視察の結果

そもそも自分は、協力隊参加前は

普通の会社員だった。好きな地理を大学で勉強した後、それを生かすべく教師になるわけでもなく、単なる利益追求の企業よりやりがいがありそうだということで、自然食品の会社に入った。そこでは5年間、環境負荷の低い生活用品の開発・仕入を担当した。この仕事は刺激的でもむしろなかったが、自分の意識はもっと生き方に「何か」を求め始めていた。農業に興味を持ち、自宅近くの有機農家に頼み込み、さらには、ついでに精神薄弱者厚生施設へも週末通

い始めた。そんなおり、協力隊にどうしても参加したくなった。もともと村落開発の知識などなかった自分、猛勉強の末、3回目の受験で何とか受かった。

さて「視察」のほうだが、3カ月間で16の島を訪れた。各島ではイン

フラの現状を調べるほか、特別な現金収入源、移住、生活観などについてさまざまな人に話しを聞いた。するとおよそ各島に共通する次のような問題点がはっきりした。

1. 学校を出た若者の仕事がないこと。
2. 教育・医療の地方格差。
3. リーフ交通の困難さ等々。

予想されたこれらの問題点が「島嶼国」という地理条件でさらに困難になっているのである。さらには出身島への相当強い愛島心（島国根性）と、きつく汚い仕事をやりたがらないという2点について強く感じざるをえなかった。

とある島は、直径が200〜300メートルほどで、真ん中から4方向の海が見えるようだった。その島のの人に、「子供が大きくなったらどうするんだい？ もう家がいつぱいじゃないか」と言うと、「たぶん2階を建てるよ」と移住の話には乗ってこない。「大きな島に移ったほうがいいんじゃないか、敷地もただで手に入るし」とさらに水を向けても、「いや他の島へは行かない。埋め立てて家を建てるよ（リーフ内浅瀬のこと）」。「埋め立てるのに、幾

【表B】 現金収入源評価のための17の要因
(17 factors for evaluation of micro enterprise)

- A. 「ビジネス的要因」 (Micro enterprise factors)
- 1 「以前からその土地にあるビジネスか」 (Is the business indigenous?)、
 - 2 「環境影響」 (Environmental impact of business)、
 - 3 「投資の回収期間」 (Time from "investment" to "benefit")
 - 4 「ビジネス環境の特異度」 (Environmental specificity)
 - 5 「ビジネスの技術的困難度」 (Business difficulty)、
 - 6 「生産性」 (Productivity)
- B. 「社会的要因」 (Social factors)
- 7 「ビジネスの社会受容度」 (Social acceptability of the business)
 - 8 「現況での任地の社会受容度」 (Present my post's acceptability of micro enterprise)
 - 9 「地方でのビジネス要求度」 (Local desire to micro enterprise)
- C. 「経済的要因」 (Economic factors)
- 10 「初期投資の大きさ」 (Initial capital expenditure)
 - 11 「運営上のコスト」 (operating costs)
 - 12 「輸送コスト」 (Transport costs)
 - 13 「市場需要」 (Market demand)
 - 14 「市場の多様性」 (Market diversity)
 - 15 「市場安定度」 (Market stability, projections)
 - 16 「市場競争力」 (Market competition)
 - 17 「ビジネスへの制限」 (Regulations constraining business)
- * 「3」の評価基準例-A 「1年以内」、B 「1~3年」、C 「3年~」

中でも忘れられないのは、デング熱にかかった(後でわかったのだが)鳥でのこと。普段はがつがつ食べているカレーやガルディアがノドを通らない。鳥の人は心配してチリをたっぷりまぶした焼き魚など用意してくれただが、食べられない。部屋には、ほんとうにたくさん

人が見舞いにきてくれた。やむなく首都まで船で、9時間近くかけて戻ることになったのだが、別れざわ、「迷惑かけたねえ」と言うのと、涙を流しながら怒り、「そんなこと言うんじゃない。元気なお前と別れられないのがつらい」と言った。1週間程の短い滞在だったのだが、今でも印象の強い島である。

プロジェクトは続行と決定。任期延長を許してくれた祖母に心から感謝しています

さて視察を終えて戻ってみると、結局がマーフィラフシ島は大臣の決断でプロジェクトを継続することが決まっていた。そればかりか、敷地面積を2倍にすること、やしの実や海亀の卵を島民に開放することなどいくつかの策も講じられていたのだ、とてもホッとした。ディレクターにはどうするかと任地のことを聞かれたが、迷わずマーフィラフシ島での仕事を希望した。

収集した情報に関しては、地方での有望な現金収入の可能性を次の7つに絞り(1.野菜栽培 2.果樹栽培 3.養鶏 4.やぎ飼育 5.海藻養殖 6.なまこ養殖 7.手工芸品づくり)、17項目(別表B)について3段階の評価をし、総合点によって優先順位の参考とすることとした。

この評価法は、視察中に会ったカナダのNGO派遣で来ていたアカアカルチャーの専門家、ステイブ・フォロウエイ氏のレポートを参考にさせてもらって、少しアレンジしたものだ。評価の結果、すでに島でス

らくらいかかるの?」「そうだなあ、3、4年かかって最低3万ルフィアはかかるな。」

別にこの会話は特殊な例ではない。どの島で聞いてもたいいていのは、これぐらいの意識で、島を離れたがらないのだ。

そんなこんなで、この視察を通してたくさんの国民、政府関係者、他国のボランティアの人たちと話すことができ、モルジブの現況や国民の

価値観をマクロに見ることができ、地方島での現金収入プロジェクトの可能性をチェックできた点で予想以上の収穫があった。

こうしてさらっと書いてしまおうだが、これが公共交通(船)のないモルジブ、結構苦勞することも多かった。基本的に移動は出費を抑えるため、他人がチャーターする船、商用船に便乗した。トイレのない島では、海岸で子供たちと並んで朝日に向かって用を足すこともあった。



畑にて。写真はババイヤの苗

ターゲットしているもの以外では海藻養殖が有望だった。

結局ここまで来るのに、任期は1年半を過ぎていた。所属先は任期を延長してほしいという。ただ一点ひっかかったのは、82歳になったばかりの祖母の存在だった。祖母は両親離婚後、父とともに一人っ子の自分を育ててくれた人だ。素直な自分の気持ちと一度日本に帰ることを綴って便りを送った。

一時はとても心細そうな祖母だったが、「思う道を踏み出したのだから、半年でも1年でも延ばしてでも、二度と戻らぬ若い人生を満足して帰国しなさい」と便りがきた。祖母の広い気持ちに感謝した。

任期延長が決まり、タイムリミットはあと1年。この間にやりかけの仕事と、「今後」につなげるための海藻栽培試験に精一杯取り組むだけだ。

海藻養殖にチャレンジしつつ、落ち着いて活動に取り組みたい

この前は3週間ほど、ステイブ氏のところをお願いして「海藻養殖」を習いに行った。自分の低レベルな

英語にもかかわらず、とても丁寧に教えてくれる。彼は一家でモルジブに魅せられた家族で、もうかれこれ10年近く国内で働いているそうだ。海藻はフィリピン、南太平洋諸国等

ではすでに盛んに養殖されている「ユキウマ属」。産業用カラゲenan(利用方法が天草に似たもの)の原料だ。潮流のあるリーフ内の浅瀬に釣り糸を張り、海藻を結ぶ。2、3か月で大きくなり、収穫できるというものである。技術的にシンブルなので、女性や子供にも作業ができるし、さまざまな職から収入を得ているモルジブ人の生活形態にマッチし、将来に向け注目されている。

このプロジェクトは水農省から委託されているモルジブのNGO「OSM」がカナダの先のNGOとジョイントで進めているものだ。これまでに現地直接働きかけていた各国NGO活動は、近年は世界的にも徐々に現地NGOのサポートという形で活動を主に、自助努力を生かすような活動していると聞く。これまで2年近くこの国において、おおむね「開発」というとまず「外」からの援助を引く張り込むことを考えるケースが多いと感じていたモルジブだけ

に、OSMのような活動がもつと国内に広がってくれればと願う。

さて現在、この国で二度目の雨季を迎えている。ほぼ1年ぶりに島に腰を据えて働けるので、とても嬉しい日々となつていく。先月はいろいろなところからかき集めてきた英語やデイビヒ語の本18冊を島民へ貸し出し用として設置し、とても喜ばれている。

この島での農作業もいまでこそ慣れたが、思えば当初はこの島の自然環境、モルジブ人の生活形態、気質も考えずに教科書通り「たい肥作り」、「日本なみに株間を取る」などをいきなり押し付けようとしていた。しかし急にそれは無理な話で、れんに腕押しだった。島でもっとも農業に「詳しい」ソマドベー氏などとともに話も聞いてくれず、彼の存在は少ない人口の中で当初かなり負担だったのを思い出す。必要にさし迫ること以外やらないという価値観を持つ彼らに、いきなり堆肥を作れでは作るのは難しい。今は穴を掘って落ち葉などをためて、日が経つてから作物を植えるという彼らのやり方が少しでも良くなるよう、生ごみなどを混ぜること、マルチすること、

密植をさけることなど将来へのステップとして指導している。今ではソマドベー氏も話を聞いてくれ、いろいろと質問してくれるようになった。

これまでの活動を振り返ると、視察の成果など流れ上、結果的に良かった点や、さまざまな人々に助けられてばかりで、つくづく自分の力の無さを実感した。ともあれ自分としては自分なりに精一杯やってきたわけで、島の人もその姿勢は認めてくれたようであり、嬉しい。

漁師に聞くと、近年は雨量が相対的に少なくなり、決まったパターンで変化していた毎年の気象サイクルが今は全然予測不可能となっている。島の侵食スペースはここ数年極端に大きくなり、「数十年後には国土が沈む」といわれている有名な説も説得力を増してくる。将来に向けてニューースも多いモルジブだが、

自分としては政府がこのプロジェクトを数年ではなく、少なくとも20、30年のスパンでみることを願うとともに、とにかくあと1年、4家族の島民と未来の島民のために将来につながるものが少しでも残せるよう精一杯やるだけである。